

2007年度実施「わかもの柏崎すみたい度調査研究」アンケートのクロス集計から
分かる柏崎の中高生ならびに大学生の柏崎への意識

江 口 潜

2008年10月

新潟産業大学経済学部紀要 第35号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.35 October 2008

2007年度実施「わかもの柏崎すみたい度調査研究」 アンケートのクロス集計から分かる 柏崎の中高校生ならびに大学生の柏崎への意識

江 口 潜

1. はじめに

本稿は、2007年度に、新潟産業大学住みたい度調査研究委員会が実施した「若者柏崎住みたい度調査研究」アンケートのデータを、著者が独立的に解析し分析したものである。したがって本稿は「若者かしわざき住みたい度調査研究」の報告書を補完する分析であると位置づけられる。

「若者かしわざき住みたい度調査研究（以下では単に住みたい度調査、と述べる）」アンケートそのものは、柏崎市内の全小・中学校、高等学校の生徒ならびに2つの大学（新潟産業大学と新潟工科大学）の学生を対象に行われた。特に、小・中学校ならびに高校についてはほぼ全数調査になっており、それは、とりわけ2007年7月に発生した中越沖地震の後に、震源地域における小・中学校ならびに高校に通う生徒に対して行われた全数的な調査になっており、その意味でも極めて貴重な社会科学的意義を持ち得るものである。

本稿ではそのようなデータについて、その調査の目的であった「柏崎の若者が柏崎を離れていく原因をつきとめ、なるべく若者に、柏崎を好きになり、愛し、住んでもらいたい、そのための方策を探る」という趣旨に沿うべく、極力、柏崎の若者の、柏崎への意識を正しく把握し、そしてその理解にもとづいた方策（若者を柏崎に引き付けるための方策・柏崎にできること）を提示しようというスタンスからの分析を遂行し、その内容を提示するものである。

分析としては、基本的に「中学・高校生」と「大学生」という2つのグループについてそれぞれ分析を行った。すなわちここでは「小学生」は、無視をした。小学生を無視したのは、単に、小学生段階ではまだ「柏崎が好き」あるいは「嫌い」といった意識も希薄であり、あまり若者を柏崎に定着させるための方策を考える上で、分析の対象にする必要はないと考えたからである。

次に、では残るのは「中学・高校」と「大学」に通う若者、ということになるが、その場合、中学・高校の生徒と大学の学生とは、全く立場や境遇が異なる。すなわち「中学・高校」の生徒は、基本的に「柏崎で育った子供たち」であるが、「大学の学生」は、その大半が「柏崎の外で育ってきて、進学先の大学が柏崎に立地していたため、柏崎に来た」という学生である。したがって、「中学・高校生」の分析は基本的に「柏崎っ子」が将来、柏崎にちゃんと戻ってきてくれるためには何が必要か、という視点から、そして「大学生」の場合は「柏崎育ちではない若者が、柏崎に引き付けられる物があるとすればそれはなにか？」という視点から分析が行われるべきであろう。そのため、本稿ではこれら「中学・高校の生徒」と「大学生」とは分けて分析が行われる。

分析の結果、中学・高校生（柏崎っ子）については

- ・ 中学3年頃から、柏崎を出たい（柏崎に住みたくない）生徒が増える
 - ・ 男子は首都圏への居住志望が最多であるが、女子は新潟市志望が最多
- といった実像（それは、決して目新しい発見ではないかも知れないが）が浮かび上がってくる。
- 一方、大学生については
- ・ 「柏崎に住みたいかどうか」と「柏崎が快適であるかどうか（あるいは柏崎が好きかどうか）」ということが、乖離していること
 - ・ 柏崎は決して若者にとって「生活するのが不快な街」ではない。しかし、だからといって「住みたい気がする街」ではない、ということ
 - ・ 「柏崎に住みたくない学生」を「住みたい気持ちにさせる条件」は、とりあえず見当たらないこと
 - ・ 学生は結局、「日本海側（新潟県内）でいいから、柏崎よりは都会である新潟市や長岡市に住みたい気持ち強い

といったことが実像として提示される。

なお、本稿では、そのような実像をもとに、では「どうすれば若者を柏崎に引き付けられるか」という具体的な政策提言には、あまり言及しない。そのような「こうすれば若者を柏崎に引き付けることができる」という「打ち出の小槌」的な政策提言は、もし容易に浮かび上がってくるようであるならば、過疎に苦しむ街は日本からなくなるであろう。本稿では、そのような「打ち出の小槌」的な「処方箋」を提示することは（そもそも何人にとっても困難な行為であり）回避し、あくまでもデータから言えることをベースに、可能性として「このような政策を、このような意図から、行うことは、もしかしたら効果があるかもしれない」という程度の政策提言のみを行っている。そのことをあらかじめお断りしておく。

以下、第2節で中学・高校生に対するアンケート結果の集計と分析を、そして第3節では大学生に対するアンケート結果の集計と分析を行う。第4節でまとめと今後のあるべき研究の方向を述べる。

2. 柏崎の中学・高校の生徒の柏崎への意識

2.1. そもそも、柏崎の中高生は柏崎が「好き」なのか「嫌い」なのか？

まず、そもそも、柏崎の中高生は柏崎が好きなのかどうか、という、その実像がどうであるか、ということは興味を持たれるところであろう。それは学年別・男女別に単純集計することにより把握できる。それが次の表1である。

表1. 学年別・男女別「柏崎が好きor嫌い? (設問10)」

		好き	どちらかという と好き	どちらとも 言えない	どちらかという と嫌い	嫌い	備考： 合計人数
中1	男子	36.5%	31.6	21.9	5.6	4.2	446人
	女子	38.9	32.2	22.8	3.4	1.1	434
中2	男子	35.3	33.3	21.7	3.7	5.9	456
	女子	36.6	33.7	19.7	7.3	2.4	406
中3	男子	30.3	31.7	25.9	6.8	5.1	409
	女子	32.3	32.3	25.4	7.4	2.3	417
高1	男子	17.4	27.7	36.1	10.1	8.1	465
	女子	23.7	34.2	26.8	6.2	8.8	496
高2	男子	20.9	29.5	30.3	8.8	10.2	487
	女子	28.2	32.7	30.4	4.7	3.8	467
高3	男子	31.1	21.5	30.1	6.9	10.1	315
	女子	33.3	26.4	25.8	8.0	5.9	321

表1を見ると、

- ・中学生は、「柏崎が好き」または「どちらかという好き」が6割以上である（それでも、「好き」という生徒の割合は学年とともに少しずつ下がってはいる）。
- ・高校生になると状況は大きく変わり、「好き」が減る（特に高1と高2）。そして「どちらとも言えない」が増える。
- ・男子は、高校生になったとたんに「嫌い」が1割前後に増える。

ということが分かる。したがって、柏崎の中高生は、(もし、中高生が成長とともに、ここで明らかになったようなパターンを示すとすれば)

- ・中3ぐらいから、やや柏崎への愛着に疑問が出てきて(すなわち「どちらとも言えない」が増え、そして
- ・高校生になると、大きく「柏崎好き」が減り、男子では「嫌い」という高校生が1割に増える(すなわち男子高校生の方が、明確に嫌う気持ちが強く、またその割合も多い)。

ということが分かる。すなわち高校入学が、「柏崎好き」が減る、1つのターニングポイントになっていることが窺われる。

2.2. では、どこに住むことに憧れているのか？

では、柏崎の中高生は一体、どこに住むことにあこがれているのであろうか。そのことも多いに興味の持たれるところであろう。そこで、(表1と同様)学年別・男女別に、住みたい地域を集計

した。それが表2である。

表2. 学年別・男女別「すみたい地域（設問14）」

		首都圏	新潟市	長岡市	上越市	関西	ない	その他
中1	男子	27.3%	17.0	11.2	4.4	10.0	6.7	11.8
	女子	32.4	21.8	12.2	3.4	13.8	9.9	5.5
中2	男子	32.0	16.8	9.2	4.8	9.6	12.2	14.6
	女子	30.5	26.1	14.0	3.4	12.5	6.9	6.4
中3	男子	29.5	23.2	11.9	2.2	9.7	13.4	10.0
	女子	26.3	29.7	11.0	2.6	14.1	7.9	7.9
高1	男子	32.2	19.1	12.0	3.0	12.0	11.8	9.4
	女子	29.4	31.2	9.2	3.6	15.7	3.8	6.6
高2	男子	35.5	24.4	10.6	3.5	8.2	9.6	7.6
	女子	28.2	37.6	9.0	2.1	8.3	5.1	9.2
高3	男子	26.3	22.5	13.0	5.4	9.5	12.3	10.4
	女子	20.2	35.2	7.4	3.4	15.8	9.9	7.7

表2をみると、中学1、2年は概ね3割が首都圏にあこがれていることが分かる。しかしながら、中学3年を越えると男子は首都圏に住みたい生徒の割合が最も多いが、女子の場合は首都圏ではなく、新潟市がトップになっていることがわかる。すなわち、柏崎の女子高生は、どうやら首都圏までは出て行かなくてもよいが、「近場の都会」である新潟市には住んでみたい、という願望を持っている生徒も3割以上いることが窺われる。

2.3. 柏崎の「好き」「嫌い」と、柏崎の「良いところ」：クロス集計分析

以下では、いくつかのクロス集計分析を行う。まず、本節では「柏崎が好きか嫌いか」ということと、「柏崎のどのようなところが良いか」という問いとを（男女別。学年は区別せず、というグループ毎に）クロス集計を行った。

このクロス集計により浮かび上がってくる姿

各年代（中学1年から高校3年まで）の、男女ごとに、それぞれ、「柏崎の好き・嫌い」と「柏崎のどのようなところが良いか」という関係が分かる。そのことによって、どの年代の男女それぞれが、柏崎のことを好きな子は「どこが良くて好き」なのか、柏崎の「好き」な子と「嫌い」な子の違いは何なのか、といったことが分かる（かも知れない）。

表3：柏崎の好き・嫌い（設問10）と柏崎のよいと思うところ（設問18）

		柏崎のどんなところが良いか？													
		山	海	人の優しさ	景色	祭り	図書館	博物館	買い物が便利	静かさ	原産があること	昔の文化がある	ない	その他	
好き	男	31.0	65.7	21.4	23.7	47.3	2.7	0.9	4.5	17.1	5.7	6.3	0.7	4.6	
	女	21.5	66.9	32.3	24.5	59.5	2.6	0.9	2.8	14.2	1.8	9.4	0.5	1.97	
やや好き	男	25.7	59.8	14.0	17.5	45.4	3.3	0.9	4.0	20.4	4.6	5.4	3.3	3.4	
	女	19.2	66.2	18.1	19.7	58.0	4.0	0.6	2.68	12.2	1.7	5.3	1.7	1.3	
中間	男	18.6	51.5	8.5	11.4	37.2	2.2	0.5	3.0	15.8	6.4	4.0	12.8	2.1	
	女	14.4	58.5	10.4	11.3	48.0	3.4	0.3	2.1	11.1	3.1	6.4	5.9	2.1	
やや嫌い	男	14.8	53.8	7.6	15.3	35.7	1.6	0.5	2.7	14.3	5.5	3.8	13.1	1.6	
	女	12.2	61.3	10.3	9.0	41.3	3.2	0.6	1.2	10.96	3.8	3.9	8.4	0	
嫌い	男	15.5	31.5	4.3	10.1	20.8	0.5	0.5	2.7	9.09	8.0	2.7	41.1	2.7	
	女	7.5	37.7	6.6	4.7	22.6	0.9	0	1.9	11.3	2.8	1.9	41.5	1.9	

クロス表から分かること、および推奨される政策など

表3を見ると、柏崎が好きであるか嫌いであるかを問わず、「海」という回答が多い。また、柏崎が好き、と答えた中高生で「良いところ」として選んだ人が多いのが、「祭り」である。

一方、柏崎を嫌い、という中高生の4割以上が、良いところが「ない」と答えている。

以上のことから、

- ・柏崎は、海を大切にすべき（中高生は、柏崎の海のことは良いと思っている。）
- ・柏崎が好き中高生は、柏崎の「祭り」が好きである。したがって、小学生、中学生、あるいは高校生のうちに柏崎の祭りに積極的に触れさせることは、若者の柏崎への愛着心を強くする可能性があり、推奨される。
- ・一方、柏崎を嫌い、という中高生の4割は、柏崎の良いところが「無い」と答えている。したがって、柏崎の「よいところ」というものを、より強く、小中学生、高校生にアピールする（教育活動等の場でアピールする、訴えかける）ことは、若者の「柏崎愛」を涵養し、柏崎離れを少しでも減らす手段として（間接的手段であるが）推奨される。

2.4. 柏崎の「好き」「嫌い」と、柏崎の「悪いところ」:

行ったクロス集計

次に、「柏崎が好きか嫌いか」ということと、「柏崎のどのようなところが悪いか」という問いとを（男女別。学年は区別せず、というグループ毎に）クロス集計を行った。

このクロス集計により浮かび上がってくる姿

各年代（中学1年から高校3年まで）の、男女ごとに、それぞれ、「柏崎の好き・嫌い」と「柏崎のどのようなところを悪いと思っているか」という関係が分かる。そのことによって、どの年代の男女それぞれについて、柏崎のことを嫌いな子は「柏崎のどこが厭で嫌い」なのか、あるいは柏崎の「好き」な子でも、柏崎のどこが「嫌い」なのか、といったことが分かる。

表4. 柏崎の「好き・嫌い」（設問10）と柏崎の悪いところ（設問19）

		柏崎の悪いところ											
		にぎやかさが無い	お店が少ない	電車・バスが少ない	周りの人がうっとおしい	嫌いな人がいる	遊ぶところが少ない	働く場が少ない	風、雨、雪	原発がある	霧閉気	ない	その他
好き	男	9.7	43.7	24.5	2.0	5.7	35.6	12.6	14.1	16.0	3.8	12.8	4.3
	女	4.8	61.3	36.4	0.8	3.0	45.3	16.9	12.7	16.5	1.2	5.8	2.6
やや好き	男	10.6	49.7	27.0	4.8	5.5	42.5	12.0	14.9	17.0	4.6	7.4	4.7
	女	6.2	70.6	40.1	0.97	3.2	51.5	13.0	15.2	16.2	2.6	2.6	2.8
どちらでもない	男	10.3	49.5	25.6	5.3	7.8	40.1	8.9	16.6	14.2	8.5	7.9	4.0
	女	8.4	67.0	41.3	2.2	3.7	49.1	11.6	15.5	16.0	5.3	2.6	4.9
やや嫌い	男	14.3	64.8	31.9	7.1	6.0	45.0	9.3	23.6	15.3	13.2	1.6	4.9
	女	12.9	62.6	37.4	3.9	6.5	58.1	7.1	18.7	17.4	12.2	0.6	5.8
嫌い	男	16.0	43.8	20.8	15.5	13.9	31.0	9.1	11.2	16.5	21.3	3.2	13.9
	女	13.2	58.5	32.1	8.5	13.2	39.6	6.6	15.1	14.1	7.5	1.8	14.1

クロス集計表（表4）から分かること、および推奨される政策など

表4を見ると、柏崎が「好き」な中高生も、

- ・買い物ができるお店が少ない
- ・遊ぶところが少ない

ということを「悪いところ」として指摘している。また、女子が

- ・電車やバスの本数が少ない

ということを悪い点として指摘している。

したがって、この結果に従うならば、「電車とバスの便」という部分が、柏崎の女子中高生を柏崎に引きとどめるための「改善すべき点」ということになる。（なお、ここでの電車やバスの便、というのが、柏崎市内の移動のためのバスや電車の便、なのか、それとも柏崎と長岡や新潟などとの間の移動のためのバスや電車の便なのか、ということは今回のアンケートでは分からない。）

2.5. 中高生は「柏崎のとりべき政策」として何を選んでいるか 行ったクロス集計

次に、学年別・男女別に「柏崎がとりべき政策」として何を選んでいるかを集計した。

このクロス集計により浮かび上がってくる姿

若者が柏崎のとりべき政策として選んでいる事柄は、裏をかえせば若者が柏崎に何を望んでいるか（柏崎に何が足りないと思っているか）ということ暗黙に語る。それを、学年別・男女別に集計すると表5のようになる。

表5：学年別・男女別の「柏崎のとりべき政策」（設問26）

		服屋を 増やす	遊べる場所 を増やす	大型店を 増やす	遊園地 を作る	電車やバス を増やす	静かな環境 を作る
中1	男	8.3	35.2	50.4	16.6	11.0	11.2
	女	28.1	28.5	45.8	14.7	11.7	4.1
中2	男	20.3	44.1	64.1	12.9	17.5	9.2
	女	61.1	51.2	78.1	19.8	26.6	5.1
中3	男	29.0	51.7	59.3	10.4	21.7	9.4
	女	50.5	51.3	63.4	14.4	36.8	4.3
高1	男	37.9	54.3	56.1	8.6	40.0	10.4
	女	54.5	47.3	64.1	10.0	65.7	7.16
高2	男	42.0	58.0	49.0	7.9	51.0	10.7
	女	45.9	52.2	52.1	9.1	70.3	5.0
高3	男	38.1	47.8	42.9	8.3	29.4	11.8
	女	50.7	57.3	55.9	8.0	62.0	6.1

表5から分かること、および推奨される政策など

クロス集計表を見る限り、

- ・中学2、3年生女子が、「服屋さんを増やす」に50%以上、○をつけている。
- ・「大型店を増やす」に○を付けた女子が多い。
- ・電車やバスの便については、高校生の女子（女子高校生）が、顕著に多い。特徴的である（このことは、女子は、高校生になったとたん、通学のためのバスや電車の便が少ないことをフラストレーションとして感じ始めている可能性がある）。
- ・静かな環境を作る、ということについては、学年を問わず男子生徒が、女子生徒の2倍の割合で○をつけている。
- ・遊園地については、中高生はあまり、望んでいない。

ということが窺われる。

以上のことから、

- ・若者は、基本的に「遊べる場所」「大型店」というものを望んでいる（そのようなものがある街に住みたい、と憧れているようである）が、それでも、
- ・男子を引き付けるには、「静かな環境」を重視すべきであり、
- ・女子を引き付けるには「電車やバスの便」を増やすことが重要（ただし、ここでの電車やバスの便というのは、柏崎市内の便であるのか、柏崎と長岡や新潟を結ぶ便なのかはアンケートでは分からない。中学女子と比べて突然高校生女子のみ突出することから、おそらく通学の便ではあるまいかと推測される）

ということが分かる。

2.6. 中高生についての要約と、若干の補足

これまでの分析から、中高生については以下のことが分かった。すなわち

- ・高校1年が「柏崎好き」が減るターニングポイント
- ・柏崎の良いところを小・中学でしっかり教えておくことは長期的な視点からは有効かもしれない
- ・男子は「①首都圏、②新潟市」の順に、女子は「①新潟市、②首都圏」の順にあこがれている
- ・大型店や服屋さんなど、基本的に「都会」というものにあこがれている
- ・女子高校生は交通の便について不満を感じている。

補足；具体的な政策の模索など

柏崎の魅力を小中学校で教える、ということについては、例えば小学校では「総合」や「課外活動」などを通じて小学生が様々な体験（例えば田植えの体験や「夢の森公園」への訪問などなど）をしたりしているようであるが、そのような活動の継続（あるいは一層の充実）ということが1つの具体的手段であろう。

また、女子高校生がバスや電車の本数が少ないことに不満を感じているが、例えば柏崎市内では市内循環のバスが老人施設を中心に回っていて、老人の移動には手厚いが、寒い冬などの季節に柏崎駅からバスで高校まで移動しようとするような高校生に対しては特段の配慮もないように見受けられる。市内を循環するバスが少し走るルートを広げて常葉高校付近も通るようにする、などの工夫は可能なのではあるまいか、と個人的には思うところである。

それから、中学・高校生が「買い物ができる店」「大型店」といったものが「柏崎にあればいいな」と思っていることは明らかであるが、それは、おそらく全国どこの地方に住む若者であっても同じことを言うであろうことは容易に想像が付く。では、柏崎は大型店や店が「ない」というと、実はあるはずなのである。フォンジェもあればイトーヨーカドーもある、マクドナルドもあればモスバーガーもある。ヤマダ電機もあればジョーシンもケーズデンキもある。ではそれだけ店舗がありながら、なおかつ柏崎の小中学生が「お店がほしい」という声を発する、その部分がなぜなのか、何を求めているのか、何が欠けていてフラストレーションを感じているのか、というところが踏み込んだ調査を行うことが今後の課題であろう。

3. 大学生

以下では、大学生（新潟産業大学学生および新潟工科大学学生）について分析を行う。

3.1. そもそも学生はどこに住んでいるのか？

まず、そもそも学生たちはどこから通っているのか（市内からどれだけ通っているか、市外からどれだけ通っているか）ということは、興味を持たれるところであろう。それは以下の通りである。

表6：どこに住んでいるか（設問3）

市内	旧西山町	旧高柳町	刈羽	県内（柏崎以外）	首都圏
61.8%	0.9	0.1	1.2	34.8	0.5

この表からも分かるように、学生は、「6割が市内（自宅および下宿）、4割が市外（から通学している）」であることが分かる。

3.2. 学生の自家用車の保有状況

次に、柏崎市内の2大学の学生が、全体として、どれくらいの割合で自分用の自動車を保有しているのかを調べた。

それが次の表7である。

表7：学生の車の保有状況（設問10）

大学1年生	2年生	3年生	4年生
47.2%	55.3	62.1	69.6

表7から、学生は

「2年生で5割、3年生で6割、4年生で7割」

の学生が自分専用の自家用車を保有している、ということが分かる。

3.3. そもそも学生たちは柏崎に住みたいと思っているのか

いよいよ、学生たちの柏崎に対する意識について調べることにする。まず、そもそも学生たちは柏崎に住みたいと思っているのかどうか、という、最も関心の持たれるところを学年別・そして柏崎市内から通っているか、県内（柏崎市外）から通っているか、という学生に分けて調べた。それが表8（市内の学生）と表9（市外の学生）である。

表8：学生たちは心の中では柏崎に「住みたい」と願っているかどうか（設問21）：市内から通っている学生

	住みたい	どちらかとい えば住みたい	どちらとも 言えない	どちらかといえ ば住みたくない	住みたくない
大学1年生	7.7%	9.6	40.4	17.3	24.4
2年生	10.0	9.2	34.6	20.0	26.2
3年生	7.0	9.2	34.1	18.9	30.8
4年生	14.8	11.6	36.1	7.7	31.6

表9：学生たちは心の中では柏崎に「住みたい」と願っているかどうか（設問21）：県内（柏崎市以外）から通っている学生

	住みたい	どちらかとい えば住みたい	どちらとも 言えない	どちらかといえ ば住みたくない	住みたくない
大学1年生	2.8%	7.0	40.8	12.6	36.6
2年生	2.6	3.5	41.7	14.8	37.4
3年生	0	5.6	30.8	18.7	43.9
4年生	3.0	5.2	42.3	12.4	37.1

これらの表を見ると、市内、市外の学生とも「どちらとも言えない」が（市外から通学する大学3年生、という例外のケースを除いて）最も多い。しかしながら、その次に多いのは「住みたくない」という答えである。

また、「住みたくない」「どちらかというと言いたくない」というネガティブな答えをする学生の割合は「市外から通学している学生」の方で高い。すなわち柏崎は、柏崎の外から通ってくる学生にとって「そこで暮らすことに、あこがれる対象となる街」にはなっていないことが窺われる。

3.4. 「住みたい」と、「好き・嫌い」「生活が快適・不快」「買い物が便利不便」の乖離

以下、この「柏崎に住みたくない」という意識の学生が、なぜ「柏崎にすみたくない」のか、ということ（可能ならば）突き止めて行きたいところであるが、その前に、いろいろ集計をしていて、私はあるひとつのことに気がついた。それを以下に示す。

それは、「柏崎にすみたい、住みたくない」ということと、「柏崎での生活が快適だ、不快だ」あるいは「柏崎が好きだ、嫌いだ」ということとは、乖離がある、ということである。すなわち両者はある意味「別のこと」なのである。

すなわち、一般的に政策立案者等は、若者を柏崎に住む気持ちになってもらいたいと思うと、「柏崎を快適にすればよいのでは」「柏崎を好きになってもらえればよいのでは」といった風に考え勝ちである。しかしながら、大学生、すなわち「柏崎育ち」ではない若者の場合、「住みたい」と「快適」「好き」といったこととは別で、両者の間にはギャップがあるのである。

実際、下の表10は柏崎に住みたいかどうか、という問いを、市内の学生と市外の学生について集計したものである。それに対して表11は「柏崎が好きですか」表12は「柏崎は快適ですか」という

問い、表13は「柏崎での買い物は便利ですか」という問いを同様に集計したものである。これら4つの表を見ると、

- ・ 柏崎が好きか嫌いか (表11)
- ・ 柏崎での生活が快適であるかどうか (表12)
- ・ 柏崎での食材や日用品の買い物が便利かどうか (表13)

ということはお互い似た反応の仕方をする (クロス集計表はここでは省略する) が、それに対して、

- ・ 柏崎に住みたいか (表10)

だけは、全く別の反応が返ってきている。すなわち表11、12、13の3つの表は「ポジティブな回答」から「ネガティブな回答」にかけて、その反応割合の分布が似ており、そしてそれらは表10 (住みたいかどうか) における「住みたい」から「住みたくない」に至るまでの反応の割合の分布の様子とは明らかに差がある。

表10：柏崎に「住みたい」と願っているかどうか (設問21)

	住みたい	どちらかといえば住みたい	どちらとも言えない	どちらかといえば住みたくない	住みたくない
市内	8.6	5.9	28.6	12.4	44.5
市外	1.7	0.9	25.6	11.1	60.2

表11. 柏崎が好きですか (設問17)

	好き	どちらかといえば好き	どちらとも言えない	どちらかといえば嫌い	嫌い
市内	18.3	24.1	32.7	11.1	13.5
市外	5.5	18.5	53.1	10.4	12.1

表12. 柏崎の生活は快適だと思いますか (設問34)

	快適	どちらかといえば快適	どちらとも言えない	どちらかといえば不快	不快
市内	8.9	26.7	31.9	17.2	14.9
市外	1.6	14.9	50.0	19.4	13.3

表13. 柏崎市内での食材や日用品の買い物は便利だと思いますか（設問35）

	買い物便利	どちらかといえ ば便利	どちらとも 言えない	どちらかといえ ば不便	不便
市内	14.3	26.7	27.0	15.3	16.4
市外	5.9	19.7	44.1	16.4	13.5

これが、柏崎に「住みたいかどうか」ということが「柏崎が好きか嫌いか」、はたまた「柏崎での生活が快適か不快的か」といったこととは乖離している、ということである。そしてこのことはすなわち、若者は

- ・ 柏崎ライフを快適にしたからといって、柏崎に住みたいと思うわけではない
- ・ 柏崎が好きだと思ふ気持ちが強くなったとしても、柏崎に住みたいと思うわけではない

といったことを意味する。

ちなみに冬の好き・嫌いということ（表14を参照）は、大学生の場合、「住みたい・住みたくない（表10）」あるいは「快適・不快（表12）」といったこととはあまり関連がない。

表14：冬は好きですか（設問16）

	冬は好き	どちらかといえ ば好き	どちらとも 言えない	どちらかといえ ば嫌い	嫌い
市内	22.2	17.7	21.5	14.1	24.4
市外	16.6	18.5	24.2	16.1	24.2

3.5. では、柏崎での生活は学生にとって「不快」なのか？ 答えは決して悪くない

柏崎が学生からあまり「住みたい」とは思われてないことは否定のしようがない。しかしながら、そのことは、上で述べたように、例えば「柏崎での生活が快適であるか不快であるか」ということとは別である。

そこで学生に、柏崎が快適かどうか（設問の34）を集計した結果（表12）をもう一度示すならば以下の通りである。

表12 (再掲)：柏崎の生活は快適か (設問34)

	快適	どちらかとい えば快適	どちらとも 言えない	どちらかとい えば不快	不快
市内の学生	8.9	26.7	31.9	17.2	14.9
市外の学生	1.7	14.9	50.0	19.4	13.2
両者の差	市内の学生は柏崎が「快適」「どちらかという快適」と思っている学生が多い。		市外の学生は「どちらとも言えない」が多い		不快、と思っている学生の割合はほぼ同じ。

市内の学生は明らかに柏崎での生活が「快適」および「どちらかという快適」と思っている学生の割合が、市外から通っている学生の場合に比べて高い。また、市外の学生は「どちらとも言えない」が50%と高くなっている。

このことは、学生にとっては、「柏崎」という街は、

- ・住めば都（柏崎市内にいる学生は、柏崎を快適だと思っている学生の割合がおおい一方、市外の学生は「どちらとも言えない」が半数である）

という街である可能性があることを示唆している。したがって、柏崎という街は、例えば受験生などの若者に対して、

- ・住んでみれば、「いいところだ」と思うような街だよ

ということを（ある程度自信をもって）アピールできる街である、ということが窺われる。

柏崎ライフの快適・不快的と車の保有との関係は？

ちなみに、柏崎での生活が快適であるかどうか、ということの原因として通常、自家用車の有無ということが考えられる。すなわち

- ・柏崎は交通手段が少ないので、自家用車を買えば移動が便利になり快適に暮らせるが、自家用車の無い学生は不便（不快）な思いをしているのではあるまいか？

という仮説が常に（大人の頭の中には）ある。

そこで、車を持っている学生と、車を持っていない学生とに分けて、それぞれ柏崎の生活の快適・不快的についてどのような答えを発しているかを調べてみた。それが表15（市内の学生）と表16（市外の学生）である。

表15. 柏崎市内から通っている学生の場合

	快適	どちらかとい えば快適	どちらとも 言えない	どちらかとい えば不快	不快
車あり	8.4	25.3	32.9	15.8	17.4
車なし	9.8	28.7	30.5	19.2	11.9

表16：県内（柏崎市以外）から通っている学生の場合

	快適	どちらかといえ ば快適	どちらとも 言えない	どちらかといえ ば不快	不快
車あり	1.5	15.8	48.6	20.5	12.6
車なし	1.8	13.7	51.8	17.8	14.3
市外から通っている学生の場合は車の有無にかかわらず、柏崎の快適・不快適についての答えの割合には差がない（ことは明らかであろう）					

表15、16を見ると、意外なことに、車の保有ということは、柏崎での生活が快適・不快適、ということに対しては何の違いももたしていない（むしろ、柏崎市内に住んでいる学生の場合は車を持っている学生のほうが柏崎のことを「不快」という学生が多くなっている）という結果が得られる。

3.6. ここまでの要約

ここまでは、

- ・学生にとっては「柏崎に住みたいかどうか」ということと「柏崎が好きか」「柏崎が快適か」ということは別
- ・学生は、柏崎のことは決して「不快適」とは思っていない。
- ・その際、自家用車を持っている・いない、は、あまり柏崎での生活の快適さに影響を与えないようだ

といったことが分かってきた。

3.7. どうすれば住みたくなくなってくれるのか？

以下では、「住みたい度調査アンケート」をもとに、では柏崎に「住みたくない」という学生に、どうすれば「住みたい気持ち」になってもらえるか、（そのような何か条件があるのかどうか、ということも含めて）調べてみた。

まず、アンケートでは、設問の(26)から(28)までを使って、「もし・たら」という条件を提示し、その条件が柏崎で満たされたら柏崎に住みたくなくなるかどうかを問うている。それに対する、柏崎に「住みたくない」という学生の反応をまとめた。それが表17である。

表17 「すみたくない」という学生の設問(26)、(27および28)への回答

	(住みたい気持ち) 強くなる	どちらかといえば強くなる	どちらとも言えない	どちらかといえば弱くなる	弱くなる
暮らし向きが良くなれば (設問26)	6.8%	14.0	58.8	2.8	17.4
自家用車さえあれば (設問27)	4.8	9.7	66.8	1.7	16.5
休日が増えれば (設問28)	4.0	5.9	56.9	6.4	26.5

表17を見る限りでは残念ながら、いずれも効果はない。すなわち、柏崎で「暮らしたくない」という学生について①暮らし向きがよくなれば、②自家用車さえあれば、③休日が増えれば、といったことが起きたとしたとしても、それでも彼ら/彼女らに「住みたい気持ち」を起こさせることには結びつかないことが窺える。

3.8. では、一体彼らはどこに住みたいのか？

では、柏崎には住みたいとは思わない学生たちは、本当はどこに住みたいのであろうか。それを調べたのが次の表18である。

表18. 柏崎に住みたくない学生が、どこに住みたいのか (設問22)

	首都圏	新潟市	長岡市	上越市	関西	ない	その他
どちらかというに住みたくない	16.9	33.8	16.9	6.3	3.5	14.7	7.0
住みたくない	21.3	28.9	14.4	5.0	5.2	13.4	11.5

表18を見る限り、要は、柏崎に住みたくない学生は、新潟市、首都圏、長岡市といった都会にあらわれており、とりわけ中でも「新潟市」という「柏崎よりは都会」「近場の、もう少し都会」に住みたいと思っている、ということが窺われる。

すなわち学生は、別に柏崎の気候(雪や風)が嫌いで「首都圏や太平洋側に行きたい」のではなく、同じ日本海側、同じ新潟県の中でいい、柏崎よりは都会の「新潟市」や「長岡市」に住みたいと思っている、というのが実情であるということが浮かび上がってくる。

この、「新潟県内でいいから、柏崎よりは都会に住みたい」という学生の欲求は、「柏崎の悪いところ」として彼らが指摘している内容にも現れている。すなわち表19を見るならば

- ・遊ぶところが少ない

という点が突出しており、それに

- ・「店が少ない」、「風・雨・雪」「電車とバスが少ない」

が続いている。

表19. 大学生の指摘する柏崎の悪いところ（設問30）

		柏崎の悪いところ											
		にぎやかさが無い	お店が少ない	電車・バスが少ない	周りの人がうっとおしい	嫌いな人がいる	遊ぶところが少ない	働く場が少ない	風、雨、雪	原発がある	霧囲気	ない	その他
市	内	25.1	36.2	27.4	1.8	4.4	53.5	7.5	32.0	16.2	6.7	2.5	7.1
市	外	22.7	32.9	34.1	0.7	3.7	49.5	5.9	24.8	19.9	6.9	4.7	5.6

また、学生が柏崎に臨むこと（表20）でも「遊べる場所」を増やす、が突出している。そのような反応も「都会志向」の反映である。

表20. 大学生が柏崎に望むこと（設問41）

		服屋を増やす	遊べる場所を増やす	大型店を増やす	遊園地を作る	電車やバスを増やす	食事をできる店を増やす
市	内	32.5	45.0	27.5	22.1	16.1	13.2
市	外	26.7	45.9	27.8	18.7	23.4	12.6

3.9. その他

表21は柏崎市外の大学生（産大生と工科大生）が、柏崎のどこに魅力を感じるか、ということであるが、「海」と「景色」と「祭り」ということが分かる。もし仮に、「海」と「祭り」ということが既にアピールされ、若者の間に浸透しているとすれば、それに加えて、若者を集める上で、柏崎は

- ・景色

という面で、もうすこしアピールをすべきである、ということが窺われる。

表21. 柏崎の良いところ（設問29）

		柏崎のどんなところが良いか？											
		山	海	人の優しさ	景色	祭り	図書館	買い物が便利	静かさ	原発があること	昔の文化がある	ない	その他
市	内	17.5	55.1	15.4	25.8	22.5	2.1	1.8	23.4	9.7	1.6	13.9	
市	外	13.7	59.0	11.6	28.1	22.7	1.8	3.5	12.1	11.1	1.4	14.5	

3. 10. 要約と補足

以上、大学生については

・柏崎に住みたいと思わない学生は、首都圏志向もいるが、それよりも新潟市や長岡市など、日本海側、新潟県内でいいから柏崎よりは都会に住みたい、という学生が多い、ということが分かった。

このことは、柏崎にとってはやや「元気のでる発見」である。すなわち柏崎に来ている学生が「住みたい」といって眼を向けている先の「他所の街」は、東京ではなく新潟市や長岡市など、「新潟県内」の都市だからである。

では、例えば長岡という都市が、果たして学生が住んだとして、本当にそれほど魅力的な都市であるのかどうか。はたまた柏崎は長岡の隣にあるのだから、柏崎に住むことと長岡に住むことに事実上どれだけの差があるのか。そのあたりを広報戦略を練るならば、十分、学生を

- ・長岡の隣の、柏崎
 - ・新潟市から高速バスで90分の、柏崎市
- に惹きつけられる可能性はあるはずである。

4. 結語にかえて

本稿では「若者かしわざき住みたい度調査研究」アンケートのデータを、中高生と大学生とに分けてそれぞれ集計と分析を行った。その結果

(1) 中高生については

- ・高校1年が「柏崎好き」が減るターニングポイント
- ・柏崎の良いところを小・中学でしっかり教えておくことは長期的な視点からは有効かもしれない
- ・男子は「①首都圏、②新潟市」の順に、女子は「①新潟市、②首都圏」の順にあこがれている
- ・大型店や服屋さんなど、基本的に「都会」というものにあこがれている
- ・女子高校生は交通の便について不満を感じている。

(2) 大学生については、

- ・学生にとっては「柏崎に住みたいかどうか」ということと「柏崎が好きか」「柏崎が快適か」ということとは別
- ・学生は、柏崎のことは決して「不快的」とは思っていない。
- ・その際、自家用車を持っている・いない、は、あまり柏崎での生活の快適さに影響を与えない
- ・柏崎に住みたいと思わない学生は、首都圏志向もいるが、それよりも新潟市や長岡市など、日本海側、新潟県内でいいから柏崎よりは都会に住みたい、という学生が多い、

ということが分かった。

なお、冒頭にも述べたとおり、本稿では、まだ「どうすれば若者を柏崎に引き付けられるか」という具体的な政策提言には、あまり言及していない。そのような「こうすれば若者を柏崎に引き付

けることができる」という具体的な政策提言は、それこそより踏み込んだ若者への意識調査、とりわけ若者が漠然とあこがれる「都会」というもののイメージの把握や、柏崎が、(例えば同じ「予算」があったとしても、その予算を使って)何をどこに作れば少しでも若者にとって魅力的な都市に近いものがそこに展開できるのか、といったことを調べる必要がある。その場合、例えば新しい「市民会館」1つをとっても駅前に作るのが適切なのかといったことが調査され直すべき、ということになるかも知れない。すなわち例えば「市民会館」に、普通の市民は一体、年に何回、足を運ぶのか、そしてそのような市民会館が駅前一等地に出来ることが若者にとって魅力ある街作りということになるのかどうか、といったことも「若者を引き付ける街作り」という観点からは再度の慎重な検討が必要になってくるかも知れない。あるいは若者を引き付ける街作り・都市作りのためのアイディアは、アンケート表調査では困難であり、聞き取り調査に基づき、都市のデザインセンスのある人物が若者が「これだ」と感じるようなものを提示し、それが賛同を得られるかどうかを確かめる、といったような手法をとることによってしかなかなか把握できないのかもしれない。

いずれにしても、具体的な政策案は、さらなる綿密な調査と、そして「トライアル・アンド・エラー」を繰り返す覚悟が必要であろう。今後、そのような調査が遂行されることが望ましいと著者は考える。

付記：「若者かしわざき住みたい度調査研究」アンケートの概要

同調査は、2007年秋以降（したがって中越沖地震の後）、新潟産業大学住みたい度調査研究委員会により実施された。調査の対象は柏崎市内（市町村合併後の柏崎市内）の全ての小学校、中学校、高等学校それぞれの全学年・全生徒ならびに2つの大学（新潟産業大学、新潟工科大学）の全学生ならびに一般社会人である。

小学校1～3年	小学校4～6年	中学生	高校生
2280	2501	2568	2552

大学生ならびに社会人については

専門学校	短大	大学	大学院	会社員	自営	不明	合計
2	3	1176	14	4	1	10	1214

参考文献等

本稿はアンケートの分析レポートであるという性質上、参考文献はない。なお、分析には統計分析パッケージであるSPSSを利用した。

謝 辞

本稿は2007年度「柏崎の個性・魅力づくり調査研究業務委託」（柏崎市総合企画部企画政策課）として新潟産業大学住みたい度調査研究委員会が受託した委託研究（若者かしわざき住みたい度調査研究）の一環として作成されたものである。同研究を行うにあたり柏崎市より研究助成を頂いたことを感謝申し上げます。また、本稿を作成するにあたり、データを提供してくださった新潟産業大

学住みたい度調査研究委員会に御礼申し上げます。なお、本稿で示される見解等はすべて著者個人のものであり、新潟産業大学住みたい度調査研究委員会あるいは新潟産業大学の見解等を表明しているものではない。

**Students' willingness to live in and send their lives in
kashiwazaki-city: messages emerged through the analysis
of the enquête to them conducted in 2007**

Sen EGUCHI

2008年10月

新潟産業大学経済学部紀要 第35号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.35 October 2008